

スイートピーの収穫以降に発生する花シミ症状の要因

花シミの要因は水滴による症状がほとんどである

背景・目的

- スイートピーでは、3月中旬以降、花シミの増加が課題となっています。出荷場で検品後、市場に到着するまでの間に症状が発生しますが、市場で処分されてしまうため、症状の検証は十分行われていません。
- このため、「収穫調整時の花シミ対策」および「輸送時の花シミ対策」試験により、発生した花シミの症状を分類して、その発生要因を把握しました。

成果の内容

①花シミ症状の分類(図1)



②スイートピーの収穫以降に発生する花シミの要因は、水滴による症状がほとんどです(表1)。

表1 発生した花シミの内訳

単位: 本、%

花シミ発生本数	水滴による症状	目玉症状	ドーナツ型症状	白斑症状	水浸状症状	縁の不整形脱色	それ以外
1,697	1,649 (97.2%)	0 (0%)	25 (1.5%)	1 (0.1%)	11 (0.6%)	0 (0%)	11 (0.6%)
n=5,400							
z) ()内は花シミ発生本数に対する発生率							

成果の活用方法(又は期待される効果)

- 収穫から輸送時に発生する「花シミ症状」のほとんどは水滴によるものであることから、結露対策など環境を改善することで発生を軽減することが期待されます。
- 普及対象は、県下全域のスイートピー生産者

留意点

- 試験は、場内3連棟ハウスのうち2連棟において、2条植え3ベットで栽培したスイートピーを用いました。灰色かび病の防除として、ボトキラー水和剤を10月上旬から1週間ごとに散布し、下旬からはダクト散布を毎日行いました。さらに、定期的に化学農薬による防除を行いました。
- 調査は、収穫後、傷およびシミのない花を50本/束に結束し、STS1,000倍液(濃度0.2mM)で16時間処理した後、出荷用段ボールに箱詰めし、10°Cで32時間の輸送シミュレーションを行いました。輸送シミュレーション終了直後に発生した花シミ症状を、図1により分類化しました。
- 調査期間は、2015年12月から2016年3月で、供試品種は「ムジカラベンダー」および「ローズピンク」です。なお、調査本数は5,400本です。